＜超越性＞の問題

Racineの悲劇作品における悲劇性の研究(1)

下堂園　真　理

"Ceux qui croient avoir du mérite se font un honneur d'être malheureux, pour persuader aux autres et à eux-mêmes qu'ils sont dignes d'être en butte à la fortune." (*Maximes*)

序

"Voici encore une tragédie dont le sujet est pris d'Euripide" (1) と Jean Racine (1639－1699) 自身が *Phèdre* に付した序文の冒頭で述べているとおり，*Phèdre* は Euripide の *Hippolyte* に典拠し，古代ギリシャの伝説，神話世界に題材を採る作品である。Racineは十一編の悲劇を残したが，古代ギリシャの伝説・神話世界に取材するものとしては，*Rhèdre*の他に，*La Thébaïde*, *Andromaque*, *Iphigénie* があり，ここではこの四編にあらわれる運命観と神々を，Racineの悲劇作品における悲劇性についての研究の一環としてとりあげる。

ところで，周知の通り，ギリシャ悲劇は，その独特の人間の運命や神々についての見方，即ち一般に悲劇的世界観といわれるものによって今日に至るまで西欧の思想に深い影響を与え続けている。フランスにおいては，ことに今世紀の中頃，ギリシア悲劇への関心が著しく高まった時期があり，その特徴は，ギリシア悲劇への哲学的関心であったことだといえる。J. Truchetはこの関心の背景として，同時代の悲劇性，ドイツの哲学，特にニーチェと実存主義の影響，コクトオ，アヌイ，ジロドウらの活動，古代ギリシアについての知識の普及，人文科学方面からの神話への興味等を挙げ，また，この哲学的関心がギリシア悲劇に見出した要素として，運命，自由，超越性，有罪性をそれぞれ検討している。(2)このようなギリシア悲劇への哲

学的関心は，フランス古典主義悲劇の分野での文学研究にも当然の影響を及ぼし，やはりTruchetが指摘するような，ギリシァ悲劇に関する理論はフランスの悲劇の実際を考慮しない，古典主義悲劇の発展を導いたフランス精神は，演劇についての余りに形而上的な観念を嫌う，古典主義悲劇理論の主要な基礎は模倣としての芸術という観念なのだからギリシァ悲劇に関する理論とは相容れない，等の反論が勿論考えられるとしても，今日ではその影響を無視することはもはやできないであろう。たとえば文芸の一ジャンルとしての悲劇，及びその本質としての悲劇性についても，前出の運命，自由，超越性，有罪性から語られることが多い。そして我々がここで取りあげるRacineの諸作品も，超越的存在により課される運命，そこでの人間の自由と有罪性を扱っているのであり，我々がここで運命と神々を問題にするのも，悲劇への現代的関心を我々も分ち持つからに他ならない。そしてこの運命と神々の問題，ことに *Phèdre* のそれは，Racineの個人的信念や信仰の問題ともからんでRacine研究の関心をそそってきたが，そこでもまた，ギリシァ悲劇，もしくは今日的ギリシア悲劇観とRacineの距離が問われているのである。例えば *"Le sacré dans les tragédies profanes de Racine* – Essai sur la signification du dieu mythologique et de la fatalité dans *La Thébaïde, Andromaque, Iphigénie* et *Phèdre"* (1970) においてやはりこの問題を研究したM. Delcroixはこの本の冒頭で次のように述べている。

> "Certes, notre sujet a suffisamment préoccupé la critique pour qu'il paraisse couramment dans ces synthèses lapidaires où elle cristallise ses éloges. Que Racine soit le poète de "l'inhumain qui est dans l'homme", qu'il ait renouvelé l'idée antique de l'oppression du destin, revivifié le mythe en l'attachant à l'expression de nos fatalités intérieures, sacralisé le plus humain des théâtres, voilà peut-être les titres qui lui sont le plus communément donnés aujourd'hui." (3)

この引用文中にある "fatalités intérieures" つまり内的宿命ということが，Racineの登場人物にみられる激しい情念について最もしばしば言われることである。我々も運命の問題を扱う以上，この観念に触れないわけにはゆかない。そしてこの観念が含む，Racineはギリシア悲劇の運命を真に継承したという評価，そこに彼の作品の悲劇性や，或いは彼の個人的な信念を見る考え方も問題となるだろう。このようにRacine研究の系譜はもとより，今まで述べてきたギリシア悲劇への今日的関心に我々としても決して無関心ではない。しかしまた，ギリシア悲劇，ギリシア悲劇

についての古典主義時代の態度，古典主義悲劇の実際，そして悲劇についての現代の解釈を混同しないように注意を払い，悲劇についての現代の解釈で Racine の作品を裁断することは慎まねばならない。

さて最初に挙げた四編の悲劇の中では，*Phèdre* が最後に書かれているのだが，この作品は独自かつ重要な位置を，内容の面からも Racine 研究の面からも占めているので，まずここで運命と神々がいかに扱われているか，その果している機能は何であるかを検討することからはじめたい。次に *Rhèdre* との異同を中心に，*La Thébaïde, Andromaque, Iphigénie* をとりあげ，最後にこれらの作品における運命と神々の解釈を，従来の Racine 研究を参照しつつ考えてみることにする。

I *Phèdre*

(1) Phèdre の内的葛藤

> "En effet, Phèdre n'est ni tout à fait coupable, ni tout à fait innocente. Elle est engagée par sa destinée, et par la colère des Dieux, dans une passion illégitime dont elle a horreur toute la première. Elle fait tous ses efforts pour la surmonter. Elle aime mieux se laisser mourir que de la déclarer à personne. Et lorsque'elle est forcée de la découvrir, elle en parle avec une confusion qui fait bien voir que son crime est plutôt une punition de Dieux qu'un mouvement de sa volonté." (1)

上の引用にみられる通り，Racine 自身が序文で，Phèdre が義理の息子 Hippolyte に対して恋を抱くのは，＜その運命により，神々の怒りによって＞なのだと保証し，彼女が乳母にこの恋を打ち明ける過程を説明している。そしてまた *Phèdre* において神々が最も印象的に言及されるのは，女主人公 Phèdre の恋情との関わりにおいてなので，我々はまず，Phèdre 自身による彼女の運命と神々の表現を検討することからはじめたい。

〔I・3〕Phèdre の乳母への件の告白は，彼女がはじめて登場する第一幕第三場で行われ母 Pasiphaé と姉 Arianeの同様に不幸な恋への追憶によってはじめられることで，Phèdre の Hippolyte への恋情が，彼女の家系に悪意をもつ Vénusの 意図

に依ることを明らかにし，結局，Racineが序文で言う通り，Phèdreの恋は神々(Vénus)の怒りにより課された<内的宿命>であること，そしてこの怒りを，人間が代々引き継ぎ引き受けてゆかねばならないことが示される。この恋情の世襲的側面が，その宿命性を保証しているのである。

O haine de Vénus! O fatale colère!
Dans quels égarements l'amour jeta ma mère.
(...)
Ariane, ma soeur! de quel amour blessée,
Vous mourûtes aux bords où vous fûtes laissée!
(...)
Puisque Vénus le veut, de ce sang déplorable
Je péris la dernière, et la plus misérable. (I, 3)

次にPhédreは乳母Oenoneにそれまでの経緯を物語る。Théséeと結婚した直後にAthènesでHippolyteと出会い，彼を愛するようになったPhèdreはそこに即座にVénusの意図を見た。

Je reconnus Vénus et ses feux redoutables,
D'un sang qu'elle poursuit tourments inévitables. (I, 3)

PhèdreはVénusのために神殿を建てさせて怒りを鎮めようとするのだが，そこで彼女は女神のかわりにHippolyteを崇める始末なので次には意地の悪い継母を装い彼を遠ざける。しかしこれらの虚しい努力にもかかわらず，"cruelle destinée"(2)によりThéséeはPhèdreをこの戯曲の舞台であるTrézèneに連れてゆく。ここでPhèdreはHippolyteと再会し，再び激しい恋情を抱くことになる。

Ma blessure trop vive aussitôt a saigné.
Ce n'est plus une ardeur dans mes veines cachée:
C'est Vénus tout entière à sa proie attachée. (I, 3)

この最後の行は，二つの力の対立を示している。一つはVénusによる恋情，一つは続いて説明される有罪感である。

J'ai conçu pour mon crime une juste terreur;
J'ai pris la vie en haine, et ma flamme en horreur. (I, 3)

情念はいかに強烈であってもPhèdreを完全に盲目としはしない。またそれがVénusによりPhèdreを罪に陥れるために意図されたものであってもPhèdreの有罪性を排除しはしない。その結果Phèdreは死を選ぶことにより名誉を守ろうとするのだが,(3) 女主人を死に駈りたてる理由を知ろうとするOenoneの懇願により，死の前にこのような告白を行ったわけである。

告白の直後に，すでに第一幕第一場でその長い不在をHippolyteやThéramèneが危ぶんでいたThéséeの死を，Panopeが報告に来る。（Ⅰ，4）それをうけて第五場でOenoneが，Théséeが死んだ今は息子の権利を守るために生きなければならないと説き，またThéséeの死によりPhèdreの恋は不義の恋ではなくなったのだから，恐れることなくHippolyteと会い，彼を息子の味方につけ，Aricieに対して連合するがよいと言う。Phèdreは自分で判断することを放棄し，かつ，もはや姦通を恐れずHippolyteと会えるというOenoneの議論は無視し，息子のために生きよという点のみを取りあげて答える。(4)

Hé bien! à tes conseils je me laisse entraîner.
Vivons, si vers la vie on peut me ramener,
Et si l'amour d'un fils en ce moment funeste
De mes faibles esprits peut ranimer le reste. (I, 5)

〔Ⅱ・5〕息子を保護してくれと頼むためにHippolyteに会いに行った時，Phèdreは彼に二つの長い台詞で恋情を告白する。最初の告白はクレタ島の迷宮を想起しつつ，そこで現実にMinotaureを退治したThéséeをHippolyteに重ね合わせる夢想的なものである。この重ね合わせで重要なことは，既に充分示唆されている(5) 不実で好色なThéséeと高潔なHippolyteの対比である。Phèdreは結局高潔なHippolyteを罪深い恋で恋しているのであってこの恋の成就は必然的に不可能であり，恋の告白さえも殆ど不可能である。まず夢想によってそれを行い，真意をHippolyteに悟られたPhèdreは，次にそれとは全く異る激しい赤裸々な調子の告白をするのだが，そこでは彼女の有罪感が重要な役割を果す。

J'aime. Ne pense pas qu'au moment que je t'aime,
Innocente à mes yeux je m'approuve moi-même,
Ni que du fol amour qui trouble ma raison
Ma lâche complaisance ait nourri le poison. (II, 5)

以上でまず自らの有罪感を力強く述べてからすぐにPhèdreはそれと対立する恋情を神々に帰す。

Objet infortuné des vengeances célestes,
Je m'abhorre encor plus que tu ne me détestes.
Les Dieux m'en sont témoins, ces Dieux qui dans mon flanc
Ont allumé le feu fatal à tout mons sang,
Ces Dieux qui se sont fait une gloire cruelle
De séduire le coeur d'une faible mortelle. (II, 5)

ここでも第一幕第三場と同じく，神々に課せられた情念という観念が問題となっているが，Phèdreはこの観念をここでは，自らを清く徳高く見せるために最大限に利用している。つまり情念は残酷な神々がかきたてるのであり，彼女自身はその恋情を抱いている自分を忌み嫌っているのだと。Hippolyteにかつて冷たくあたったのはこの情念を抑えるためであり，恥ずべき告白をするに至ったのは子供のためなのだと彼女は続けて述べるが，これらも同様に自己を出来る限り有罪感と同一化し，倫理的に見せる役割をになっている。しかし子供のことは忘れてHippolyteへの恋情のことばかり話してしまった。そこで彼女は彼に自分を殺すようにと迫る。

Venge-toi, punis-moi d'un odieux amour.
Digne fils du héros qui t'a donné le jour,
Délivre l'univers d'un monstre qui t'irrite.
La veuve de Thésée ose aimer Hippolyte!
Crois-moi, ce monstre affreux ne doit point t'échapper.
Voilà mon coeur. C'est là que ta main doit frapper.
Impatient déjà d'expier son offense,
Au-devant de ton bras je le sens qui s'avance. (II, 5)

ここではより明確に有罪感と恋情が対立し分離する。"amour", "monstre", "coeur"

などの語であらわされる恋するPhèdreを，倫理的存在としてのPhèdreが自己から切り離し，高潔な恋人と一緒に処罰しようとしている。驚きのあまり茫然としているHippolyteに苛立ち，彼女は彼から剣をもぎ取るに至る。

Frappe. Ou si tu le crois indigne de tes coups,
Si ta haine m'envie un supplice si doux,
Ou si d'un sang trop vil ta main serait trempée,
Au défaut de ton bras prête-moi ton épée.
Donne. (II, 5)

罪深い恋で恋するには余りにも高潔な恋人なので，この恋情を断罪することによってのみPhèdreが彼と結ばれることは可能になる。そこで彼女は恋情と有罪感の対立をおし進め，後者によって前者を断罪するが，その断罪がHippoliteと共になされ，彼と結ばれることを可能にする意味において，それは“un supplice si doux”なのである。ここにおいて彼女の恋情と有罪感はまた一つのものとなるはずであった。

情念は神々により課せられた打ち勝ち難い災厄，つまり内的宿命とみなされているが，それはPhèdreから明晰さを奪うには至らず，彼女の有罪感と対立する。ここでまずPhèdreの内的宿命の神秘，もしくは彼女の自由と責任が問題になる。彼女は情念を神々に帰し，そしてまたそのたびごとに有罪感を表明するのである。しかし彼女が高潔なHippolyteの前で，彼と結ばれるために，有罪感とのみ同一化し，それと対立する情念を可能な限り外化する時，情念を抑えることもそれと折り合うこともできない有罪感が，情念を神々におしつけるという構図が，読者の側では見えてくる。つまりPhèdreの内的宿命とは，彼女の内部での情念と有罪感の深刻な葛藤の表明であり，彼女の言及する運命や神々は，この葛藤を効果的に表現し，反対にこの葛藤こそが，運命や神々に比類ない喚起力を与えるのだと解釈することが可能である。Racine自身の序文に反した解釈であるし，ここでPhèdreが神々の悪意を信じているという設定を疑うことはできないが，この解釈に従えば，神々による情念が彼女から有罪感を取りあげないのは当然のこととなる。

〔Ⅱ・1，2〕第三幕の最初の二つの場で，Phèdreにおける情念と有罪感の対立は，変質した形であらわれる。それまで自律的な倫理意識に依っていた有罪感がHippolyteに対する恥の感情へ変ると同時に，彼女は希望を抱くようになっている。

De l'austère pudeur les bornes sont passées.
J'ai déclaré ma honte aux yeux de mon vainqueur,
Et l'espoir, malgré moi, s'est glissé dans mon coeur.
(III, 1)

そして彼女はこの恋を忘れるようにと言う乳母の忠告を退け，政治的権力を差し出すことでHippolyteの歓心を買うように，そして彼を翻心させるためにあらゆる手段を試みよと命じる。乳母が退場したあと第2場は，Phèdreの Vénus への祈りで占められる。この祈りは彼女の嘆かわしい状態の描写で始められるが，Vénusにその非道な迫害を咎めるのでも，或いは迫害をやめるようにと願うのでもなく，ただ Vénus に全面的に降伏し，次は Vénus の手を逃れ未だ恋を知らない Hippolyte を攻撃し彼を恋する者にせよと祈るのである。

〔Ⅱ・3〕しかしこの状態は第三幕第三場のThésée生還の報ですぐに覆される。Phèdreの最初の反応はまず死のうということである。彼女は Thésée と Hippolyte が揃って現われる場面を想像し，ここでHippolyteは彼女の恥の感情を体現している。

Je verrai le témoin de ma flamme adultère
Observer de quel front j'ose aborder son père,
Le coeur gros de soupirs qu'il n'a point écoutés,
L'oeil humide de pleurs par l'ingrat rebutés. (III, 3)

Hippolyteは Thésée に話すだろうか？　しかし

Il se tairait en vain. Je sais mes perfidies,
OEnone, et ne suis point de ces femmes hardies
Qui goûtant dans le crime une tranquille paix,
Ont su se faire un front qui ne rougit jamais.
Je connais mes fureurs, je les rappelle toutes. (III, 3)

ここで彼女は自らの罪を認めてはいるが，その罪自体を後悔するのではなく，それがThésée に知られはしないかという心配，或いは知られてしまう時の屈辱，Hippolyteに対する恥などを想像して苦しむのである。後で Oenone の台詞で現わされ

るように，倫理ではなく名誉が問題なのだ。死後に子供たちに不名誉を残すことを気づかっているPhèdreに，Oenoneは Hippolyteの先手を打って彼をThéséeに讒訴することを提案する。Phèdreは，

Moi, que j'ose opprimer et noircir l'innocence! (III, 3)

と反発を示すが，Oenoneは，Phèdreはただ黙っていればよいこと，Théséeは Hippolyteに軽い罰しか加えないだろうと述べてPhèdreを説得しようとする。

(. . .) et pour sauver votre honneur combattu,
Il faut immoler tout, et même la vertu.
On vient; je vois Thésée. (III, 3)

こうして Oenoneの説得の終りでThéséeが現われ，この危機的な場でPhèdreは上の台詞をうけて次のように答える。

Ah! je vois Hippolyte;
Dans ses yeux insolents, je vois ma perte écrite.
Fais ce que tu voudras, je m'abandonne à toi.
Dans le trouble où je suis, je ne puis rien pour moi. (III, 3)

ここでもまた第一幕の終りと同様，Phèdreは決断を放棄し，Oenoneのなすがままに任せる。Phèdreが，徳を犠牲にしても名誉を守ろうという Oenoneの決意に賛成なのか反対なのかは結局不明である。彼女は，Hippolyteの目に自分の破滅が書かれているのを見る，と言っているが，それは彼女がそこに，恥と不名誉への恐れと有罪感を混然と投影しているということに他ならない。

〔Ⅳ・4, 5, 6〕さて，Théséeが Oenoneの中傷を信じ，Hippolyteを追放し，Neptune に彼を滅ぼすように頼んだあと，第四幕第五場でPhèdreはThéséeに Hippolyteの助命を請うがそれはThéséeがもらしたHippolyteとAricieの恋の知らせにより中断される。

Je volais toute entière au secours de son fils;
Et m'arrachant des bras d'Oenone épouvantée,
Je cédais au remords dont j'étais tourmentée.
Qui sait même où m'allait porter ce repentir?
Peut-être à m'accuser j'aurais pu consentir;
Peut-être, si la voix ne m'eût été coupée,
L'affreuse vértié me serait échappée. (IV, 5)

彼女はここで後悔やThéséeへの真相の告白の可能性を語っているが，それはAricieの恋人であるHippolyteのために彼女が冒そうとした危険によって彼女の悲惨な状態を強調するためなので，彼女をThéséeのもとへおもむかせた倫理的意識を我々は正確には知ることができない。HippolyteのAricieとの恋を知った彼女は，第五場と第六場の途中まで，幸福で潔白な彼らと自分を対照させつつ嫉妬に苦しむ。Phèdreの高貴な祖先でありSoleilと重ね合わされて潔白の象徴として第一幕でも現われたjourのイメージが，ここでもこの対照を強調する。(6)

Tous les jours se levaient clairs et sereins pour eux.
Et moi, triste rebut de la nature entière,
Je me cachais au jour, je fuyais la lumière. (IV, 6)

また第三幕第一場で既にOenoneが指摘し，第三場でも強くあらわれていた，(7)
誇張された被害感や自己憐憫に傾きやすいPhèdreの想像力が重要である，
そして，

Au moment que je parle, ah! mortelle pensée!
Ils bravent la fureur d'une amante insensée. (IV, 6)

このような考えに耐えられず，PhèdreはThéséeを動かしてAricieをも亡きものにしようと決心するが，この決心をするやいなや，彼女は自分の嫉妬と自分がしようとしていることを驚きをもって認識し，今度は全力をあげて自分を責めはじめる。

Que fais-je? Où ma raison se va-t-elle égarer?
Moi jalouse! Et Thésée est celui que j'implore!
Mon époux est vivant, et moi je brûle encore! (IV, 6)

この自己告発の過程でも，彼女の祖先の神々とやはり祖先の Soleil が重要になる。

Misérable! et je vis? et je soutiens la vue
De ce sacré Soleil dont je suis descendue?
J'ai pour aïeul le père et le maître des Dieux;
Le ciel, tout l'univers est plein de mes aïeux.
Où me cacher? Fuyons dans la nuit infernale.
Mais que dis-je? mon père y tient l'urne fatale; (IV, 6)

Phèdre は母 Pasiphaé を通して Soleil の直系の子孫であるが，また Jupiter の血筋でもあるので，結局ギリシアの神々はみな彼女の祖先であり，彼ら，特に Soleil は天の高みから子孫の行動を見守っている。ことに第一幕の，

Noble et brillant auteur d'une triste famille,
Toi, dont ma mère osait se vanter d'être fille,
Qui peut-être rougis du trouble où tu me vois,
Soleil, je te viens voir pour la dernière fois. (I, 3)

は，家系の名誉の観念とも結びついた倫理的存在として Soleil を表しており，第四幕ではそれが他の全ての神々へ拡張されて，Phèdre の有罪感の高まりを示す。ところで天が，これら正義と名誉を同時ににになう神々で一杯であるとしても，地獄にかくれて彼らの目から逃れることはできない。彼女の父 Minos が地獄の審判官となっているからだ。

Ah! combien frémira son ombre épouvantée,
Lorsqu'il verra sa fille à ses yeux présentée,
Contrainte d'avouer tant de fortaits divers,
Et des crimes peut-être inconnus aux enfers! (IV, 6)

紆余曲折を経たのち，Phèdre の有罪感はここで頂点に達し，地獄についての長い想像を生む。再び彼女が Vénus にここで言及するのは，前にも見た通り，彼女の目にもいまわしい恋の素因を自分以外のところに探そうとするからである。

Pardonne. Un Dieu cruel a perdu ta famille:
Reconnais sa vengeance aux fureurs de ta fille. (IV, 6)

Vénusの介入は，情念の激しさによってしか証明されないが，この情念の激しさと対立する有罪感こそがVénusの介入という観念をうみだしたのだった。Vénusの介入が，有罪感にとって抑えることも折り合うこともできない恋情を説明していたのと同様に，ここでは祖先の神々，Soleil, Minosが彼女を圧倒するに至った有罪感を表現する役割をになっている。彼女がこれらの神々を信じているのは疑いえないとしても，それらの神々を喚起し現前させるのは，彼女の有罪感に他ならない。このPhèdre自身の倫理性をになわされた正義と名誉の神々は，彼女をなだめようとして乳母が引き合いに出す神々とは全く対照的である。

Les Dieux même, les Dieux, de l'Olympe habitants,
Qui d'un bruit si terrible épouvantent les crimes,
Ont brûlé quelquefois de feux illégitimes. (IV, 6)

この俗悪な忠告にPhèdreは激しく反発し，乳母を責めはじめる。この傾向を彼女は既に第三幕でもみせているが(8)第三幕およびこの箇所で，自分の破滅をもたらしたとして彼女が乳母の責任を問うのは，立派に死のうとしている時にそれを妨げ，希望をかいまみさせ，Hippolyteに会わせたことである。

(. . .) Voilà comme tu m'as perdue.
Au jour que je fuyais c'est toi qui m'a rendue.
Tes prières m'ont fait oublier mon devoir.
J'évitais Hippolyte, et tu me l'as fait voir. (IV, 6)

そしてHippolyteの死を招く中傷は，Oenoneの罪として，Phèdreは自分の共犯関関係を無視する。

(. . .) Pourquoi ta bouche impie
A-t-elle, en l'accusant, osé noircir sa vie? (IV, 6)

我々が見てきたように，重大な局面でいつもPhèdreは判断を放棄し， Oenoneのなすがままとなり，また第三幕第一場ではOenoneの忠告を退けて恋に身を委ねたのだった。かつOenoneの行動は女主人のその子供たちのためを思って為されたものなので，PhèdreがOenoneを

Détestables flatteurs, présent le plus funeste
Que puisse faire aux rois la colère céleste! (IV, 6)

の一人とするのは不当と思われる。Phèdreのこの時点での有罪感の強さを全く理解していないOenoneの忠告の俗悪さが彼女を苛立たせたのがその原因であろう。しかしまたPhèdreは情念の場合と同様に，罪の原因を自分以外のところに求めようとしているともいえる。Oenoneの罪を数えあげる引用が示すように，彼女は物事の運びを全てOenoneに押しつける。そして有罪感が頂点に達した時もそうであったように，最初から罪として認めている恋情のみを自分の罪としてひきうける。

〔Ⅴ，7〕 OenoneとHippolyteの死後，Phèdreは第五幕の最後でThéséeに真相を打ち明けつつ死ぬ。そこでも彼女は第四幕と同じ態度をとり，情念は神々に，Hippolyteを死に至らしめた過程はOenoneに帰す。

Le ciel mit dans mon sein une flamme funeste;
La détestable Oenone a conduit tout le reste. (V, 7)

Hippolyteの死に関する彼女の責任は積極的に彼を助けなかったこととされる。

Le fer aurait déjà tranché ma destinée;
Mais je laissais gémir la vertu soupçonnée. (V, 7)

ところで，Phèdreの服毒がHippolyteの死を知る前に行なわれたのか，後なのかが問題となる。何故ならばもし彼の死を知っていたとすれば，Phèdreは*Andromaque*のHermioneのように恋人のあとを追って死んだとも考えられ，もし知らなかったのならば，彼女はHippolyteを救うために死んだと考えられるからである。(9)
或いはまた，知っているか知らないかによって，Phèdre自身による彼女の罪の把

握が異なってくる。知らなかったと考えなければ，第四幕における有罪感の高まりのあと，第五幕の初めでもまだ生きているHippolyteを何故彼女は救おうとしなかったのが問題となろう。もっともこの間の事情を説く手がかりは戯曲の中にはなく，我々としては，たとえPhèdreがHippolyteの死を知っていようといまいと，第四幕で頂点に達した有罪感にとらわれたまま死を選んだこと，恋情が神々によるものであるとしても，第一幕においてそうであったように，この恋情に関して彼女は自分の有罪性を認めているのだと考える。

Et la mort, à mes yeux dérobant la clarté,
Rend au jour qu'ils souillaient, toute sa pureté. (V, 7)

この最後の言葉は，第一幕でのSoleilへの呼びかけと響きあい，円環を閉じるかのように見える。また事実，Phèdreにとっては，第一幕でそうであったように，彼女の恋情の有罪性のみが問題なのだ。あたかも第五幕にわたる戯曲の展開など無かったかのように，Phèdreは自己について最初と殆ど同一のイメージを作りあげつつ死んでゆく。

(2)*Phèdre*における神々についての通念

我々はこれまで，Phèdreの内的葛藤を中心に神々への言及をたどってきた。しかしここでは，Phèdreから他の人物へと視線を移して彼らが把握している人間の運命と神々についての観念を見るとともに，Phèdreのそれと比較することにする。

まずPhèdreにおいて特徴的であったVénusによる恋情という観念であるが，これはこの戯曲の世界に広く普及しており，"Vénus"という語がしばしば"amour"の言い換えにすぎない程である。例えば，女に対してそれまで無関心だったHippolyteがAricieを愛しているらしいと気付くやいなやThéramèneは言う。

Vénus, par votre orgueil si longtemps méprisée,
Voudrait-elle à la fin justifier Thésée?
Et vous mettant au rang du reste des mortels,
Vous a-t-elle forcé d'encenser ses autels?
Aimeriez-vous, Seigneur? (I, 1)

情念が神々から課された屈辱である以上，それを人間が支配することはできない。そこで自分の恋を恥じて言葉を濁すHippolyteに彼は重ねて言う。

Ah! Seigneur, si votre heure est une fois marquée,
Le Ciel de nos raisons ne sait point s'informer. (I, 1)

次にPhèdreの恋は，母Pasiphaé，姉Arianeから受けつがれてきた世襲的な側面をもっていた。これについてHippolyteは，彼を不当にThéséeが責める時に

Je me tais. Cependant Phèdre sort d'une mère,
Phèdre est d'un sang, Seigneur, vous le savez trop bien,
De toutes ces horreurs plus rempli que le mien. (IV, 2)

と述べ，真相を暴いて弁明はしないものの，Phèdreの側の罪をほのめかす手段としている。

もう一つの血筋，つまり正義と名誉をあらわすSoleil, Minosと祖先の神々についてはOenoneがくり返し述べている。Phèdreが自殺しようと決心している時には

Vous offensez les Dieux auteurs de votre vie; (I, 3)

またThéséeの死の知らせのあとでPhèdreの母親としての責任を強調し

Et ses cris innocents, portés jusques aux Dieux
Iront contre sa mère irriter ses aïeux. (I, 5)

と彼女をいさめている。

Grands Dieux! Ciel! 等の語は，驚きや恐れなどの強い感情を示すために非常にしばしば使われる。これらは勿論祈願にも用いられる。PhèdreはOenoneを追い払いつつ言う。

Puisse le juste ciel dignement te payer! (IV, 6)

これらの叫びや祈りに慣用されている神々や運命を一つ一つ取り上げるのは無意味だが，しかしこの慣用を支えている見解，つまり出来事は良いにせよ悪いにせよ神々の意図によるという見解は重要である。それはまず，恋情のような心理的なものではなく，外的出来事をのみ対象とし，次に神々の正義を問題とするとき個人的な差異を示す。例えばHippolyteにとって神々はつねに正義をなすと考えられている。だから彼はThésée亡きあとAthènesの継承権がPhèdreの息子に落ちたと聞くと，

Dieux, qui la connaissez,
Est-ce donc sa vertu que vous récompensez? (II, 6)

といぶかしむ。しかし最後まで神々の正義を疑わず，Thésée に追放された後も Aricie に，

Mon coeur pour s'épancher n'a que vous et les Dieux. (V, 1)

Sur l'équité des Dieux osons nous confier:
Ils ont trop d'intérêt à me justifier; (V, 1)

と希望をもって語る。それに比べてThéséeの態度はより状況に左右されるものである。

La fortune à mes voeux cesse d'être opposée, (III, 4)

と生還の喜びを語りはじめるのをPhèdreには不審な態度で遮られ，Hippolyteには慌しい出発の意図を示されると，

O ciel, de ma prison pourquoi m'as-tu tiré? (III, 5)

とたちまち考えを変え，Oenoneの中傷を聞かされたあとでは，

Avec quelle rigueur, Destin, tu me poursuis! (IV, 1)

と嘆く。そしてNeptuneに息子を亡きものにせよと頼むが，（Ⅳ，2，3，4）その後疑惑が深まるにつれ頼みを取り消す。（Ⅴ，5）しかし結局Hippolyteは死に，Thésée は，

(. . .) quand je lui tends les bras,
Les Dieux impatients ont hâté son trépas? (V, 6)

Inexorables Dieux, qui m'avez trop servi! (V, 6)

Je hais jusques aux soins dont m'honorent les Dieux; (V, 7)

と神々を憎むに至るのである。

ここで我々はHippolyteとThésée の悲劇のスケッチを見ることができる。Hippolyte の場合は彼が神々の正義を信じているのに神々はそれに答えないゆえにおこる悲劇，Thésée の場合は神々が彼の軽率な頼みを即座に聞き届けたゆえにおこる悲劇である。これらの神々は，Phèdreにみられるように情念とか倫理感などの意識に関わるのでなく，先に述べたように出来事を按配すると考えられている。ところがPhèdreは前出の慣用的な叫びや祈りの文句を除いては，劇中の事件を決して神々の意図に帰そうとはしないので，この点において他の人物と際立った差異を示している。しかし，彼女の言うVénusによる情念，その世襲性，名誉と正義の存在である祖先の神々という観念は他の人物と共有しており，ただそれを，彼女自身の内面の葛藤を通して比類ない強度で表わしているといえる。

(3) *Phèdre*の構成

Quand tu sauras mon crime, et le sort qui m'accable,
Je n'en mourrai pas moins, j'en mourrai plus coupable. (I, 3)

第一幕でのPhèdreのこの台詞が，この戯曲の筋を全て要約している。冒頭から有罪感に苦しみ死を決意している彼女をより罪深くする方向へとこの戯曲の筋は進む。ここでは筋の問題を，Phèdre への視点の集中とあわせてとりあげる。

〔第一幕〕最初の三場は状況の説明にあてられている。第一場で読者は，Hippolyte

の Aricie への愛，Thésée の長い不在と Phèdre の衰弱を知る。第三場では Phèdre が Oenone の懇願に負けて Hippolyte への愛を打ち明ける。彼女が告白を終え，もはや誰にもわずらわされずに死のうとするちょうどその時，Panope が Thésée の死を彼らに知らせに来る。（Ⅰ，4）この知らせがこの戯曲の動きを開始させる。既に詳しく見た通り，Thésée の死の結果，Phèdre は息子の権利を守るために生きざるをえなくなり，また Phèdre の恋から少くとも姦通の面が除かれる。この二つの結果を結びつける乳母に励まされ，Phèdre は Hippolyte に会いに行くことになる。

〔第二幕〕Thésée の死の報は Hippolyte にも伝わり，その結果彼は第二場で，Thésée に捕われていた Aricie を解放し，また起源をたどれば Aricie に帰されるべき国家権力を彼女に戻そうと約束する。そしてその時彼は彼女に恋を告白し彼女もそれを受け入れる。次に第五場で Phèdre が Hippolyte に恋を告白すると彼は驚き拒み，Phèdre は彼の剣で自殺しようとするが Oenone がそれを防ぎ，剣が手中に残される。

さてこの二幕では Hippolyte，Phèdre，Aricie の恋が扱われ，彼らはそれぞれの腹心に順に恋を打ちあける。（Aricie は第二幕第一場で。）次に Hippolyte と Aricie が互いに告白を行ったあと，その事実をただ一人知らない Phèdre が Hippolyte に恋を告白する。この二幕にわたる相愛と報われぬ恋の平行的進行が，読者の目に Phèdre を孤立化させ，彼女の恋に悲愴な色どりを増し，彼女に視線を集中することを助けると考えられる。

第二幕の最後の場面は読者に Athènes の人々が Phèdre の息子を Thésée の後継者として選び権力を委ねたこと，Thésée が Epire に現われたという噂，そして Hippolyte が Phèdre の恋に自らまでも汚されたと感じ，それを葬り去ろうとしていることを教える。この Hippolyte の決意を Phèdre が知ることはない。

〔第三幕〕希望を抱くようになった Phèdre は，Hippolyte が恋愛に関心がなく政治権力に野心があると思いこみ，自分の息子に権力が委ねられたという知らせを，彼の歓心を買うために利用しようとする。また Hippolyte が Phèdre の告白に沈黙し続けていたのは，愛について語られるのを初めて聞いて驚いたからだと考え，Vénus に Hippolyte を恋する者とせよと祈る。ここでもまだ Phèdre は，Hippolyte が Aricie を愛しており，既に政治権力をも彼女のために投げ出していることを知らない。そこでこれらの場面は前二幕にもまして Phèdre の孤立を読者に印象づける。

特にVénusへの祈りはきわめてアイロニカルな効果をあげている。次に第三場ではThéséeの生還が真実であることが判明する。これがpéripétieとなり，それまで絶望と希望の間を往来していたPhèdreを決定的に悲惨な状態へ追いやる。 PhèdreがHippolyteに恋を告白したのは，彼女の恋から姦通の要素を除き，また子供の保護を彼女に義務づけるThéséeの死を信じていたからであり，そのうえこの告白は意図的になされたものではないので，この告白は，なされた時点では，決して重大な誤ちではなかった。しかしThéséeの生還はこの誤ちの意味を全く変え，取り返しのつかないものにする。 Oenoneがここで女主人の名誉を守るために先手を打ってHippolyteを中傷することを提案し，PhèdreをHippolyteと会わせた時点に続いて，Phèdreの罪を重くする役目を，その善意にもかかわらず，或いは善意なるがゆえにになう。自らの誤ちの取り返しのつかなさに驚き，不名誉の心配に圧倒されているPhèdreは混乱のうちにこの提案を受け入れ，Théséeを迎える時にその挨拶を巧みに避けてOenoneによるHippolyteの中傷を助ける。こうしてThésée生還はPhèdreの告白の意味を変え，それを重大な誤ちとしたばかりか，彼女の罪を深くする方向へと彼女を進ませる。一方，ThéséeはPhèdreの不審な態度のわけをHippolyteに尋ねるが，沈黙を守ることを決意している彼は曖昧な態度を示し，自分は冒険を求めて出発する希望をThéséeに伝える。

〔第四幕〕前三幕ではPhèdreに集中していた悲劇的な様相が，ここから次第にThéséeとHippolyteの上にも広がりはじめる。そしてまた劇は，Phèdreの罪と同時にHippolyteの死に向っても進むことになる。

幕間のOenoneの中傷をうけて第一場はThéséeの怒りで始まり，彼はHippolyteに対して<近親相姦の>愛を非難し，保護者であるNeptuneに息子を滅ぼすように頼む。第四場では後悔したPhèdreがThéséeにHippolyteを助けるように頼みに来るが，ここではじめてHippolyteとAricicの恋を知り，一時の嫉妬にかられて，Hippolyteを救い，自分も殺人を犯さずにすます機会を失ってしまう。ここでもまた第一幕におけるThéséeの死の知らせと同様，時を得た，もしくは配置の場所をえた情報がPhèdreを，立ち直ろうとする意志にもかかわらず，罪の方へおしやるのである。第六場の中ほどで嫉妬のきわみにおいて，第三幕のはじめ二場を除いてPhèdreにつきまとっていた有罪感が再び現われ，その頂点に達し，的はずれの忠告をするOenoneを断罪するに至る。

〔第五幕〕第一場で Aricie と Hippolyte が出発の打ち合わせをしていると，不安を覚えた Thésée が現われる。彼は Aricie に真相を質そうとするが，Hippolyte に口どめされている彼女はそれをはぐらかし，次に Thésée は Oenone を再び尋問しようと思いつく。（第三，四場）Panope が Oenone は既に海に身を投げ，Phèdre は悲しみに沈んでいると伝えるので，自分の誤ちをほぼ確信した Thésée は，Neptune に願いをとりさげる。（第五場）しかし続く第六場で Théramène が Hippolyte の死を伝え，最後に Phèdre 自身が全て告白して死ぬ。ここでは Phèdre はこの最後の場にしか登場しない。一方，Hippolyte の死は，あとで触れるように合理的な説明が可能ではあるが，Neptune が Thésée の願いにこたえてもたらしたものという印象を与えずにはいないので，ここで Phèdre のあずかり知らぬ神がこの戯曲の筋に大きく関わってくることになる。しかし Neptune は Thésée の要請に応じて Hippolyte を死に至らしめ，Thésée の要請は Oenone の中傷に発しているのだから，Phèdre が Hippolyte の死に対して責任があることに変りはない。

Thésée の死の知らせと彼の生還という二つの事件が，唐突な印象を与えぬよう伏線をはりめぐらされつつ，この戯曲に与えられている。最初の事件は Phèdre に誤ちを犯させ，次の事件はその誤ちの意味を変え，より重大な罪を彼女に犯させる。ここから戯曲は，Phèdre の罪と同時に Hippolyte の死に向っても進んでゆく。もう一つの情報が Phèdre に立ち直る機会を失わせ，Hippolyte の沈黙と Thésée の軽率に助けられて Neptune が Hippolyte を死に至らしめる。そして Hippolyte の死により，Phèdre は，彼に対して不倫の恋を抱いたのみならず彼の死をも招いた女として死んでゆくのである。

(4) 結論。Phèdre の運命

(1)の最後で見たように，Phèdre は最後の告白で，自分の罪を主として最初から有罪感を抱いている恋情に限定し，恋情は神々に帰し，Hippolyte の死に関しては責任を Oenone に求め，自分の罪としては黙認をあげている。しかし彼女が息をひきとったあとで Thésée が，

D'une action si noire
Que ne peut avec elle expirer la mémoire! (V, 7)

と叫ぶ時，彼にとってはPhèdreの希望も絶望も内心の葛藤も存在せず，ただ不倫の恋を抱き息子を死なせた女として，そのような邪悪な行為の記憶のみを残してPhèdreは死んだのである。ちょうど第三幕でPhèdre自身が

Je mourais ce matin digne d'être pleurée;
J'ai suivi tes conseils, je meurs déshonorée. (III, 3)

とOenoneに予言しているように。読者に把握されるPhèdreは，有罪感を抱きながらも事件の連鎖にまきこまれ，彼女がHippolyteの死に関する責任をどう考えようと，より罪深くなり，殺人をひきおこして死ぬ。このようなPhèdreのあゆみが，この戯曲の五幕にわたって展開されているのである。

Phèdreは自分が罪深くなってゆく過程を最後の告白においてOenoneで説明し，彼女に責任を求めている。しかしOenoneが重大な局面でイニシアチヴをとったとしても，局面の変化をひきおこしたのは主に二つの事件であり，これらが決して技巧や偶然の印象を与えぬよう入念に準備され，登場人物の心理的反応を利用しつつ，Phèdreをより罪深くしてゆくのである。すでに指摘したとおり，この世界での通念に反して，Phèdreは決してこの事件の背後に神々の手を認めようとはしない。第三幕第二場のVénusへの祈りが皮肉な形で聞き届けられていたことを彼女は第四幕第四場ではじめて知るのだが，その時でさえ彼女は神々の悪意に言及しようとはしない。Phèdreは，Racineの序文に忠実に，自分の恋のみに神々の介入を限定し，そこでPhèdreの恋は，人物の意識に及ぼされる神々の作用として内的宿命とよばれている。しかし神々に課された恋情というこの観念は，Phèdreの内部での恋情と有罪感の激しい対立の表現として，宿命の超越性を問わないレベルで解釈することが可能なのである。一方，恋情と激しく対立している彼女の有罪感をからかうように，彼女の内面と深くからみあいながら，彼女をより罪深くしてゆく事件の連鎖は，神々に帰されることはないにしても，彼女の運命を我々の目につくりだす。この運命は，彼女の内面と彼女が遭遇する出来事の両方を含みつつ成立しているので，<広義の>の運命とよぶことにしたい。それはほぼ一貫して有罪感にさいなまれている人間がより重大な罪を犯してゆく過程である。Phèdreは，彼女の内面と出来事の皮肉な暗合を統一する視点をもたず，その結果，この広義の運命を自覚しない。そしてこの戯曲は，他の登場人物，つまりThéséeやHippolyteについては，彼らの<悲劇>のスケッチを描くにとどめ，場面の配置を利用してPhèdreに読者の視

線を集中させながら，そこに Phèdreの広義の運命を浮かびあがらせているのだと考えられる。

I *Phèdre* まで

ここでは，*Phédre*にあらわれた運命と神々についての観念を手がかりに，*La Thébaïde, Andromaque, Iphigénie* をとりあげ，あわせてこの観念の扱いにみられるRacineの態度の変化をおうことにする。Phèdreで問題となったのは，

(1) 恋情など心理に関わる神々
(2) 出来事を決定する神々
(3) 名誉や正義を体現する祖先の神々
(4) ある家系に呪いをかける神々

である。また登場人物のがわの

(1) 悲観的な心性
(2) 神々の正義への要請

なども手がかりとして付け加えられよう。

(1) *La Thébaïde*

*La Thébaïde*は1664年，Palais–Royal で Molière の一座により初演されたRacineのデビュー作である。Oedipeの息子 Étéocle と Polynice の戦争が主題であり，この戦う兄弟と平和を願う母 Jocaste と娘Antigone，そして漁夫の利を得んとして兄弟を戦わせるCréonの三つの立場が描かれているが，第三幕第五場まで Jocaste と Antigone，第三幕第六場の Créonの独白からCréon の視点が入りこむ。

Phèdreの恋情に相当するものとしては，第四幕第一場で Étéocle が述べる兄弟間の憎悪がある。

Nous étions ennemis dès la plus tendre enfance;
Que dis-je? nous l'étions avant notre naissance.
Triste et fatal effet d'un sang incestueux!
Pendant qu'un même sein nous renfermait tous deux,
Dans les flancs de ma mère une guerre intestine
De nos divisions lui marqua l'origine.

Elles ont, tu le sais, paru dans le berceau,
Et nous suivront peut-être encor dans le tombeau.
On dirait que le ciel, par un arrêt funeste,
Voulut de nos parents punir ainsi l'inceste,
Et que dans notre sang il voulut mettre au jour
Tout ce qu'ont de plus noir et la haine et l'amour.
(IV, 1)

ところで"Que dis-je ..." 以下七行は1697年の版で書きなおされた部分であり，それ以前の版では，

Et déjà nous l'étions quelque violence:
Nous le sommes au trône aussi bien qu'au berceau
Et le serons peut-être encor dans le tombeau.

の三行がその部分を占めていた。つまり，近親相姦の報いとしての憎悪を，生れる以前，母の胎内にまで延長させたのは，Racineが *Phèdre* を書いた後の，最晩年の版においてのみなのである。(1) それ以前の版では，Étéocleは幼児からのPolyniceとの不和，抗争を述べ，それが両親による近親相姦への罰なのだと考え，不和，抗争という出来事を神々に決定されたものと解釈しているが，1697年版はこの不和を母の胎内にまでさかのぼらせることによって，二人の憎悪の超自然性を強調している。その結果彼らの憎悪は，Phèdreの恋情と同じく，神々に決定された登場人物の心理，つまり内的宿命の色彩を帯びることになった。しかしÉtéocleとPolyniceは不和，抗争に熱中しており，Phèdreのような葛藤は経験しない。そしてJocasteとAntigoneにとって彼らの憎悪は，その起源がどうであれ，神々が一族に次々となめさせる災厄であり，Créonにとっては政治権力を奪取するための手段にすぎないので，結局この内的宿命は，*Phèdre*を書き終えたRacineが，昔の作品に付け加えたエピソードの域を出ない。

さてこの一族をおそう災厄は，*Phèdre*におけるPhèdreの家系に対するVénusの恨みに似た世襲的側面をもつ。つまりOedipeが父を殺し母Jocasteとの間に子供をもうけ，その罪が子供に及び，戦争が始まる。そして神託は一族の滅亡を予言する。(2) ギリシア神話の系譜をたどれば，これらの禍いも全く理由がないわけではないが，少くともこの戯曲の中では取りあげられない。そこでJocasteから見れば，

Œdipe の父殺しと近親相姦の罪も，知らずに犯したことなので，その罪を犯させ罰し続ける神々の不正を彼女はくり返し責める。(3) ここで Thésée にみられた神々への抗議が，明確にあらわれている。また Jocaste は，神々についてきわめて興味深いことを述べている。 Ménécée の英雄的犠牲行為で平和が訪れると喜んでいる Antigone に，不正な神々のやり口を説く第三幕第三場で彼女は次のように言う。

Connaissez mieux du ciel la vengeance fatale:
Toujours à ma douleur il met quelque intervalle;
Mais, hélas! quand sa main semble me secourir,
C'est alors qu'il s'apprête à me faire périr. (III, 3)

ここまでが一般論で，次の８行では，その日一日の悲喜交々の動きが解説される。

Il a mis cette nuit quelque fin à mes larmes,
Afin qu'à mon réveil je visse tout en armes.
S'il me flatte aussitôt de quelque espoir de paix,
Un oracle cruel me l'ôte pour jamais.
Il m'amène mon fils; il veut que je le voie;
Mais, hélas! combien cher me vend-il cette joie!
Ce fils est insensible et ne m'écoute pas;
Et soudain il me l'ôte, et l'engage aux combats. (III, 3)

そして結論。

Ainsi, toujours cruel, et toujours en colère,
Il feint de s'apaiser, et devient plus sévère:
Il n'interrompt ses coups que pour les redoubler,
Et retire son bras pour me mieux accabler. (III, 3)

ここで Jocaste は個々の出来事のみならず，その日一日の悲喜交々の動き全てを，彼女をより苦しませるために神々が意図したものと解釈している。つまり，開戦，Jocaste の調停への努力（Ⅰ，３）神託（Ⅱ，２） Jocaste の Polynice に対する説得（Ⅱ，３）両軍の休戦無視（実は Créon の策動による，Ⅱ，４）であるが，これ

ら全てを神々に帰す点においてJocasteは Phèdreと全く対照的な位置にあり，そしてまたこの極端な位置は他のいかなる登場人物によっても継承されない。というのも彼女の言うその日一日のあゆみはこの戯曲がはじまってからそれまでの筋に他ならず，彼女が神々の残酷なやり口と見る希望と絶望の交錯は， péripétieの積み重ねで観客の興味を引きつけておく劇作家の手法に他ならないからだ。 Jocasteはここで自分の運命を解説するのみならず戯曲の構成を解説するというあやまちを犯した。(4) この処女作をのぞいて Racineは二度と登場人物にこのような誤ちを犯させることはないが，登場人物の運命を示すうえで， Racineがいかに筋や場面の配置などの構成上の問題を重視していたかをこの箇所は示していると思われる。しかし Jocasteはこの明晰さを持ち続けられない。次の第四場で，その腹黒さを疑っていた Créon の見せかけの翻心を信じることにより，平和を信じてしまうからである。

ここに見られるとおり，この戯曲の焦点は平和の可能性にあり，筋は戦争と平和の間を絶え間なく揺れ動く。神託も挿入されているが，戦争の素因は兄弟の憎悪と権力欲， Créonの策動であり，結末も兄弟間の決闘と他の登場人物の絶望による自殺で終り，全てが合理的に処理されている。

(2) *Andromaque*

1667年に初演された*Andromaque*は，Oresteは Hermioneを愛し， Hermioneは Pyrrhusを愛し， Pyrrhusは Andromaqueを愛し，Andromaqueは亡き Hectorを愛しているという連鎖で有名であるが，四人の主要な登場人物の重きに優劣をつけ難い。Oresteがこの鎖の中で最も不利な立場にあり，彼が最もしばしば自らの運命を嘆くので，ここではOresteを中心に考えたい。

彼は， Phèdreが Hippolyteを忘れようと努力したように， Hermioneへの報われぬ恋をあきらめようとしていたが，<運命のわな>(5)により，彼女のいる Buthrotへ外交使節として赴くことになった。彼の Buthrot到着からこの戯曲は始まる。そこで彼は

Je me livre en aveugle au destin qui m'entraîne. (I, 1)

と述べ Hermioneへの恋に身をまかす。この "destin" はやはり97年版で訂正され

た個所でそれ以前は "transport" であった。(6) これもまた，*Phèdre*を書いたあとのRacineが，内的宿命の観念をそれ以前の作品に及ぼしているあとと考え得る。しかし，*Andromaque*は，*La Thébaïde*では二次的にしか扱われていない恋情が，Racineに関して最もしばしば言われる恋情の抗い難さが，初めて充分に描かれた作品であるのに，登場人物の誰も，Phèdreのように自分の情念に神々の意図を認めようとはしない。それよりは出来事を神々の意図によるものとして解釈する慣習が前面に現われている。最も重要なものとして，最後の狂乱の場におけるOresteを引用する。

Grâce aux Dieux! Mon malheur passe mon espérance:
Oui, je te loue, ô Ciel, de ta persévérance.
Appliqué sans relâche au soin de me punir,
Au comble des douleurs tu m'as fait parvenir.
Ta haine a pris plaisir à former ma misère;
J'étais né pour servir d'exemple à ta colère,
Pour être du malheur un modèle accompli. (V, 5)

Oresteは二回，希望を垣間見ている。最初は第二幕第三場で，PyrrhusはAndromaqueを愛しているので自分はHermioneを連れて帰ることができると思いこんでいる時であるが，この喜びは全く束の間で第四場のPyrrhusの翻心により打ち砕かれる。次は，AndromaqueがPyrrhusとの結婚に同意したがゆえにやはりHermioneと共に出発できるようになった第四幕第三場であるが，ここでの喜びも，Hermioneがすぐに Oresteの意にそまぬPyrrhus殺害を命じるので深く味わわれるわけではない。そして第五幕第三場でPyrrhusを殺して戻って来た彼をHermioneはののしり，Pyrrhusのあとを追って死ぬ。Oresteはただ Hermioneのためだけに外交使節の役目を忘れ，婚礼の神殿で殺人を犯し，そのうえ Hermioneに背かれたわけである。この過程において彼は殆ど希望を味わっていないので，最後の狂乱の場でも，Jocasteの言うような希望と絶望を交互に経験させる神々ではなく，次々に予期していなかった不幸を経験させる神々が問題となっている。つまり彼はHermioneへの恋にまつわる不幸の積み重ねに神々の悪意を見ているのだが，それを，Jocasteのようにこの戯曲の構成を読者に意識させるという誤ちは犯さずに，行なっている。途中でこのような神々に彼は反抗を意図するものの実行には至らない。

Mon innocence enfin commence à me peser.
Je ne sais de tout temps quelle injuste puissance
Laisse le crime en paix et poursuit l'innocence.
De quelque part sur moi que je tourne les yeux,
Je ne vois que malheurs qui condamnent les Dieux.
Méritons leur courroux, justifions leur haine,
Et que le fruit du crime en précède la peine. (III, 1)

ここでは，Jocasteにみられた不当な神々への抗議が反抗へとすすめられている。他にJocasteとOresteとの比較で興味深いことは，RacineがOresteから例の母殺しの前歴を全く消し去っており，その結果Phèdreの家系へのVénusの恨みや，Oedipeの一族の世襲の災厄という側面がここでは脱落しているということである。そこで神々の悪意は不幸の積み重ねに見られるだけで，それを証明するものがない。その結果Oresteの，不幸における選民意識とでも言うべきものが重要となる。

Oresteの過去の抹殺が示すように，ここでとりあげる他の三つの作品に比べ，*Andromaque* は最も神話，伝説の色彩がうすい悲劇である。そのなかでAndromaqueにおけるトロヤ戦争とHectorの思い出は重要であり，PhèdreにおけるSoleilや祖先の神々と同様，Andromaqueのあり方を規定している。Pyrrhusから，彼と結婚するかHectorの遺児を殺すかの二者択一を迫られると彼女はHectorの墓に詣でて思案する。

Voilà de mon amour l'innocent stratagème;
Voilà ce qu'un époux m'a commandé lui-même. (IV, 1)

第三幕と第四幕の幕間におけるAndromaqueのこの決意を中心に，筋は四人の主要な登場人物の心理的連鎖反応により全て合理的に進む。

(3) *Iphigénie*

Iphigénieの初演はAndromaqueの七年後，1674年である。この間にRacineは主にローマ史に題材をとる*Britannicus, Bérénice, Bajazet, Mithridate*の四悲劇を発表している。

*Iphigénie*は*Andromaque*の登場人物の親たちの世代を扱う。トロヤ戦争に船出

せんとするギリシア軍の前で，風が突然なぎ，困り果てるギリシア軍の総師Agamemnon に神話は，次のように告げる。

Vous armez contre Troie une puissance vaine,
Si dans un sacrifice auguste et solennel
Une fille du sang d'Hélène
De Diane en ces lieux n'ensanglante l'autel.
Pour obtenir les vents que le ciel vous dénie,
Sacrifiez Iphigénie. (I, 1)

その結果 Agamemnon は娘 Iphigénieを犠牲にしなければならなくなる。彼の内心の苦しみと，彼の奸計により事情を知らされずに Aulide へおびき寄せられたIphigénie と母 Clytemnestre, 恋人の Achille の側の誤解，真相の発見，抵抗などがこの戯曲の内容である。

第一幕第一場で，Achille が Iphigénie との結婚を急いでいると称してIphigénieをおびき寄せたことを後悔している Agamemnon は，またしても虚偽の手紙を Arcas にもたせ，Achilleは結婚を嫌がっているという口実で，Iphigénie を Aulide から遠ざけようとする。ここで Agamemnon は彼の夢枕に立つ神々について語っている。

Pour comble de malheur, les Dieux toutes les nuits,
Dès qu'un léger sommeil suspendait mes ennuis,
Vengeant de leurs autels le sanglant privilège,
Me venaient reprocher ma pitié sacrilège,
Et présentant la foundre à mon esprit confus,
Le bras déjà levé, menaçaient mes refus. (I, 1)

この詩句にAgamemnonの意識への神々の介入を見，Phèdre の内的宿命 の先駆と考える評者もあるが(7)このテーマは決してこれ以上発展させられない。Agamemnon が娘を犠牲にすることに同意するのは，ギリシア軍総師としてトロヤを征服するという功名心に駆られているためであり，或いは犠牲を拒んだ際の祭司 Calchas とギリシア兵の怒りを恐れるためであり，それが Agamemnonの娘への愛情と対立しているのであって，彼の意識を神々が決定していることを示す箇所は他にはなく，また彼の意識において宗教心が大きな位置を占めているわけでもない。第一幕第五場で Arcas を派遣したにもかかわらず Iphigénie が Aulide に到着してしまったことが

分ると，

Juste ciel, c'est ainsi qu'assurant ta vengeance,
Tu romps tous les ressorts de ma vaine prudence! (I, 5)

Seigneur, de mes efforts je connais l'impuissance.
Je cède, et laisse aux Dieux opprimer l'innocence. (I, 5)

と自分の計略の失敗を神意と解し，娘の犠牲に同意する。第四幕では，Iphigénie と Clytemnestre の抗議に出会い，また娘への愛情に動かされて

Hélas! en m'imposant une loi si sévère,
Grands Dieux, me deviez-vous laisser un coeur de père? (IV, 5)

と嘆くが，続く Achille との対立で自尊心を傷つけられ，犠牲を決意する。ここで Agamemnon を動機づけているのは，ただ彼の自尊心のみである。

Ma gloire intéressée emporte la balance.
Achille menaçant détermine mon coeur:
Ma pitié semblerait un effet de ma peur. (IV, 7)

しかし命令を下そうとして兵士たちを呼びながらもう一度彼はためらう。そして最終的に Iphigénie を救うが，Achille との結婚は許さないと決心する。（IV，8）

ところで，この残酷な神話に対する登場人物たちの態度であるが，彼らは決して Thésée や Jocaste に見られた神々への抗議，Oresteの反抗を示そうとはしない。Agamemnon は娘に従順を説きながら，不正な神々への軽蔑を示している。

Montrez, en expirant, de qui vous êtes née:
Faites rougir ces Dieux qui vous ont condamnée. (IV, 4)

第三幕第五場で自分が犠牲に供されることを知った Iphigénieは

Ciel! pour tant de rigueur, de quoi suis-je coupable? (III, 5)

と叫ぶものの，この決定を最も素直に受けとめる。彼女にとっては自分の命よりもAchilleの愛の方が重要なので，彼女は神々の残酷さを自分の幸福が原因だと考え，安らかに受け入れるのである。

Qui sait même, qui sait si le ciel irrité
A pu souffrir l'excès de ma félicité?
Hélas! il me semblait qu'une flamme si belle
M'élevait au-dessus du sort d'une mortelle. (III, 6)

そしてまた Agamemon が Achilleとの結婚は許さないと決めると

Dieux plus doux, vous n'avez demandé que ma vie!
Mourons, obéissons. (V, 1)

と進んで祭壇に向う。一方Achilleは神々に対して反抗的というよりもいかなる神々からも自由に描かれている。

Croyez du moins, croyez que tant que je respire,
Les Dieux auront en vain ordonné son trépas:
Cet oracle est plus sûr que celui de Calchas. (III, 7)

Clytemnestreも神々は責めようとせず，もっぱらAgamemnonの功名心を責める。

Cette soif de régner, que rien ne peut éteindre,
L'orgueil de voir vingt rois vous servir et vous craindre,
Tous les droits de l'empire en vos mains confiés,
Cruel, c'est à ces Dieux que vous sacrifiez; (IV, 4)

彼女は第四幕第四場と第五幕第四場で二度にわたりAgamemnonの血筋を問題にする。Agamemnonの残酷さを責めるにあたって，Agamemnonの父が弟の子供を殺しその肉を弟に食べさせたという伝説を引き合いにだすのだが，これは，Hippolyteが Thésée に Phèdreの罪をほのめかすにあたり彼女の血筋に触れるのと同様である。

そして神託については

Un oracle dit-il tout ce qu'il semble dire?
Le ciel, le juste ciel, par le meurtre honoré,
Du sang de l'innocence est-il donc altéré? (IV, 4)

と神託の真意を疑い，結末へ伏線をしきながら，神々の正義をたのんでいる。この神々に彼女は第五幕第四場で激しい祈りを捧げる。ギリシア軍を沈めよと海や風によびかけ，Agamemnonの父の蛮行を見て後ずさったという太陽によびかけ，犠牲を行いつつあるギリシア兵やCalchasにやめよとよびかける。
彼らが流しつつある血はJupiterの子孫の血なのだから。

C'est le pur sang du Dieu qui lance le tonnerre .....
J'entends gronder la foudre, et sens trembler la terre.
Un Dieu vengeur, un Dieu fait retentir ces coups. (V, 4)

この祈りはArcasの

N'en doutez point, Madame, un Dieu combat pour vous.
Achille en ce moment exauce vos prières; (V, 5)

という知らせにひきとられ，そこでJupiterはたちまちAchilleと混同される。しかしいずれにせよClytemnestreの祈りがかなえられたことに変りはない。何故ならIphigénieは助けられ，そのかわりEriphileの血が流されるからである。最後の場でその模様を報告するUlysseによれば，その時Clytemnestreの祈りのとおりの天変地異が起こり，かつまた兵士の噂として扱われてはいるがDianeの顕現もあった。

こうして結末において，それまでAgamemnon一族にゆえなく敵対的であった神々は，母親の祈りに答える正義の神々となり，Eriphileにのみ敵対的な神々となる。Agamemnonの煩悶も他の人々の抗争も，神託の誤解に基づいていたので，誤解が解ければ全て意味のないものとなり，AgamemnonとAchilleも和解して彼らは大団円を迎え，Eriphileだけが一身に悲劇的な相貌を引き受けることになる。このよ

うな結末の設定を序文でRacineは二つの点から説明する。つまりAristoteの主人公の定義に反するので，Iphigénieのような徳高く愛らしい人物を犠牲に供することは出来ない。また，ある伝承にみられるように，Dianeの救いや変身によって彼女を助けることは，"vraisemblance"に反する。そこでEriphileという人物の発見により，彼はこの戯曲を企てることができ，Aristoteの定義にもvraisemblanceにも反せず，また内的必然性の規則をも守り得たのである。

> "Ainsi le dénouement de la pièce est tiré du fond même de la pièce." (8)

確かにこれらの規則は守り得ているが，この戯曲が，Iphigénieらの悲喜劇の世界と，Eriphileの悲劇の世界に分裂している印象を与える結果になったのも確かである。(9)

Eriphileは，JocasteやOresteやPhèdreと同じく神々の呪いを浴びた人物として自分を描く。

> Le ciel s'est fait sans doute une joie inhumaine
> A rassembler sur moi tous les traits de sa haine. (II, 1)

そのような彼女に対してDorisは，OenoneがPhèdreにしたように，悲観的な傾向を咎める。

> Quoi, Madame! toujours irritant vos douleurs,
> Croirez-vous ne plus voir que des sujets de pleurs? (II, 1)

彼女は孤児であり，（Thésée と Hélèneの間の娘なのだが）彼女の出自は彼女にも分らず，彼女がそれを知ろうとすれば身を亡ぼすことになる，と神託が予言している。(10) LesbosでAchilleの捕虜となった彼女は，Calchasに自らの出自を尋ねるためと称してIphigénieにつき従いAulideへやって来たのだが，それは実はAchilleを愛しているがゆえであった。

Au sort qui me traînait il fallut consentir:
Une secrète voix m'ordonna de partir,
Me dit qu'offrant ici ma présence importune,
Peut-être j'y pourrais porter mon infortune; (II, 1)

このように彼女はそもそも自分の不幸が恋人たちの幸福に影を落とすことを願ってAulideへ来たのだが，その願いのとおり，そこでIphigénieは犠牲にされることになっている。そして第二幕でIphigénieの幸福が脅やかされているのを見ると，彼女に敵対的な運命を自分の嫉妬に利用することをEriphileは思いつく。

Et si le sort contre elle à ma haine se joint,
Je saurai profiter de cette intelligence
Pour ne pas pleurer seule et mourir sans vengeance. (II, 8)

第四幕第一場で既にIphigénieに下された神託を知っている彼女は，この神託も，AchilleのIphigénieへの愛を示す機会となるので，神々が彼女を悲しませるために下したものと考え，はじめは嘆くばかりであるが，Agamemnonのためらい，Clytemnestreや Achilleの抵抗，そしてギリシア軍にいきさつが未だ知らされていないことを考慮してIphigénieの犠牲を危ぶみ，自分が神託をギリシア軍に触れまわろうという計略を抱く。この計略は，嫉妬によるものではなく，トロヤ方である彼女の愛国心によるもののように装われているが，第十一場で実行に移される時には嫉妬によることが明らかになる。

Plus de raisons. Il faut ou la perdre ou périr.
Viens, te dis-je. A Calchas je vais tout découvrir. (IV, 11)

ギリシア兵を扇動して神殿に向ったEriphileはそこでCalchasに出目を明かされ断罪される。

Sous un nom emprunté sa noire destinée
Et ses propres fureurs ici l'ont amenée.
Elle me voit, m'entend, elle est devant vos yeux,
Et c'est elle, en un mot, que demandent les Dieux. (V, 6)

Iphigénie を犠牲にせよと命じた神託の本当の狙いは Eriphile であったことがここで判明し，Iphigénie に下された神託と Eriphile に下されていた神託が一つのものとなる。そして Calchas がふりあげた手を Eriphile はおしとどめ神殿で自刃して終る。

Eriphile の歩みにおいて，神託は，*La Thébaïde* のそれよりも遙かに重要な役割を果す。R. Picard は Pléiade 版の *Iphigénie* に付した解説で，Calchas は，神々よりは Achille の剣幕におされて Iphigénie と異なる犠牲者，つまり Eriphile を選んだのだと考えているが(11)たとえそうだとしても Eriphile が，身を亡ぼしながらでなければ出目を知りえない，という第一の神託を実現しながら死ぬことに変りはない。しかもこの実現は，Eriphile の報われぬ恋と嫉妬が，Iphigénie に下されたかと見えた第二の神託を利用しようとしたがゆえになされたのである。これらの神託の起源の超自然性は問わないことにしても，彼女に対して一貫して敵対的であった神々と協調できると考えたまさにその時に Eriphile は破滅し神託どおりの死を迎えるということが，第二の神託は，彼女に対して神々が仕掛けた罠に他ならないと読者に感じさせる。つまり Eriphile にとっての二つの神託は，Phèdre にとって二つの事件が，彼女の恋情や不名誉を恐れる気持を利用しつつ，Phèdre をより罪深くしその運命を形造っていったように，Eriphile の情念を利用し，神々の悪意を忘れさせ，あらかじめ予言された破滅へとおもむかせることによって，神々に呪われた人間としての彼女の運命を完成させるのである。しかし Eriphile は，

(. . .) Et pour troubler un hymen odieux,
Consultons des fureurs qu'autorisent les Dieux. (IV, 1)

という台詞で，神々と協調できるという誤った考えを抱いたことも，神々の執拗な悪意を想起することもなく，ただ Calchas に知らされた自分の出自への誇りにかきたてられ，自殺するのである。

Arrête, a-t-elle dit, et ne m'approche pas.
Le sang de ces héros dont tu me fais descendre
Sans tes profanes mains saura bien se répandre. (V, 6)

(4) 結論

以上で，*Phèdre*に先立つ三編の，ギリシアに取材した悲劇における運命と神々への言及を，*Phèdre*との比較を中心に，検討してきたわけだが，ここでまず結論できることは，神々が不当に人間を圧迫しつつ人間の運命を定めるという見解を，Racineが全ての悲劇において採用し，幾人かの登場人物にこの見解を述べさせているということである。しかし全ての登場人物が神々の悪意の犠牲になるわけでは決してない。AndromaqueやIphigénieのEriphileを除く全ての登場人物はいわば幸福な結末を迎える。また反対にHippolyteのように自分を神々の犠牲と考えることなく死んでゆく場合もある。神々の不当な圧迫への登場人物の態度も，JocasteやThéséeの抗議からOresteの反抗などそれを嘆く傾向が強いとはいえ，AchilleやIphigénieは神々を超越した態度をとる。そしてHippolyteのように神々の正義を期待して報われない場合もあれば，Clytemnestreのように報われる場合もある。だから次に，Racineの登場人物は神々に対して多様な態度をとり，Racineもまた登場人物と神々を一定の型の関係におしこめることはない，と結論できよう。

この多様性の中で，Jocaste – Oreste – Eriphile – Phèdreが，神々の不当な圧迫の犠牲として自分たちを描き，一つの系譜を示す。この系譜においてPhèdreはその内的宿命，つまり心理状態に神々の介入を受けることにより独自な位置を占める。Étéocleの内的宿命としての憎悪は既に触れたとおりPhèdre執筆後の加筆なので，またAgamemnonの夢枕に立つ神々は軽く触れられているにすぎないので，内的宿命は，Phèdre執筆時にRacineが得た着想であると推定されよう。Jocaste, Oreste, Eriphileは不幸な事態の連鎖の背後に神々の悪意を認めており，彼らにとっての神々は出来事を決定するだけで心理状態には介入しない。神々が出来事を決定するという観念は，Phèdreの世界にも広く流布しているが，PhèdreはJocasteやOresteと異なり，自らの歩みの背後に神々を認めようとはしない。これもPhèdreの独自性である。つまりPhèdreにおいてRacineはそれまでの出来事を決定する神々という観念を捨て登場人物のある心理を決定する神々という観念を展開することにより一つの転回を示した。しかしだからといって，Phèdreの運命を考えるにあたり，彼女の内的宿命である情念だけが重要で，*Phèdre*という戯曲における諸々の事件は重要でないわけではない。Ⅰで見たとおり，これらの事件は，Phèdreの有罪感と情念の内的葛藤とからみあいつつ彼女の広義の運命を読者の目に呈示しているのである。この広義の運命という点に関して，EriphileがPhèdreの先駆的な役割を果していると考えられる。Eriphileは，報われない恋や嫉妬，運命の嘆き，神々の敵意，人間的な面での孤立など多くの点でPhèdreの素描と考えられている

が，恋情を神々に帰すこともなく，また内的葛藤も経験しない。彼女はただ自分の明らかにされていない出自や，それを知れば身を亡ぼすことになるという神託や，報われない恋など不幸な事態に神々の悪意を見て運命を嘆くのであるが，読者の目に映る彼女の運命はそれにとどまらず，神託が彼女の情念を利用し，彼女に微笑みかけるかとみせかけて破滅へ導くところに，Eriphileの広義の運命が形造られる。そしてこの広義の運命と，それを自らは悟らないところにおいて，EriphileはPhèdreに最も似通っている。ではこの広義の運命を支配しているのは誰なのか。PhèdreもEriphileも彼女達の広義の運命を悟ることはなく，その支配者に言及することもないので，解釈は読者に委ねられている。Phèdreに恋情を，Eriphileに神託を課した神々が想起されてもよいし，或いは誰が決定したというのでもない，いわば開かれたものと受け取ってもよい。

ここで我々はこの問題を劇作法の面からとらえ直すことができる。勿論，超自然的な力によって決定されているという運命観と，精緻な劇作法によって造形されている運命は異なる問題のたて方に属しており，同一の面では論じられない。しかし戯曲において前者を可能にするのはあくまでも後者であり，Racineが*Phèdre*において，一人の（登場人物ではなく）女の運命の造形に成功した時，Phèdreへの視点の集中や，内的葛藤と事件の，配置とテーマの両面での照応などにみられる精緻な劇作法がそれを可能としていることを認めないわけにはゆかない。一方，Racineがその登場人物と神々との関係を決して一定の型におしこめないこと，つまりRacineのこれらの作品における神学の非一貫性が，出来事を決定する神々であれ，心理に介入する神々であれ，登場人物の言及する神々とは，Racineの何らかの個人的な信念に基づいているというよりは所与のギリシアの神話・伝説を劇作法上の要請により処理したものであると解釈することを可能にする。出来事を決定する神々から心理に介入する神々へというPhèdreにおける転回も，神々を内的葛藤により合理化し，かつJocasteの誤ちの轍を踏むことを避けて，劇作家の手を見せないための劇作法上の要請に応えているのではないだろうか。

ともかく我々は，登場人物が言及する神々とその神々が決定しているとされる彼らの運命と，実際に読者の目に像を結ぶ彼らの運命との間にずれを認め，Racineが，Jocaste以来，Oreste，Eriphileを通じてPhèdreに至るまで終始関心をもち続けたのは後者の運命の造形であり，Phèdreの広義の運命がそれを最も豊かに印象的に達成したと結論しうる。そしてこの運命の背後にもなお超自然的な力を認めるか認めないかは，Racineや*Phèdre*の読者のみならず，ギリシア悲劇以来の悲劇の自

己解釈の問題なのである。

Ⅲ 超越性と悲劇性

(1) 十七世紀におけるRacineの特殊な位置

これまで我々は，Racineの登場人物の言及する運命と神々を四編の悲劇にわたって検討し，彼らが自ら悟る運命が，読者に把握される彼らの運命とは必ずしも重ならないこと，また，登場人物の言う運命を決定しているとされる神々も非一貫的で限定された役割しかになっていないことを指摘してきた。しかしながら十七世紀のフランス古典主義悲劇の中にRacineを置くと，そもそも彼が，神々が不当に人間を圧迫しつつ人間の運命を定めるという見解を，これらの悲劇において採用したということ自体がRacineの特殊性を決定していると思われるのである。

十七世紀のキリスト教文明のもとでは，キリスト教の神の観念からは離れて古代ギリシアの神の観念の再構成がなされていたわけではなかった。M. Delcroixは，当時ギリシアの神々は一般に宗教的意味をもたず，それゆえにこそ，その使用が可能だった，キリスト教の神と安易に混同されることはあっても，絶対的正義を欠いているのでそれにふさわしいものと考えられず，詩人は彼らがfableとよぶものに熱中していたのだと言っている。(1)ことに荘重なジャンルである悲劇の作家は，伝統的に“vraisemblance”を重んじ，またそこで彼らの世界観を観客に委ねなければならないがゆえに，他のジャンルに比べてギリシアの神々を扱うのが困難であった，とR.–C. Knightは言う。 十七世紀においては，不正な神々とは，殆ど把握できない考えだった。(2)

ところでRacineも，神々が古典悲劇の主要な規則である戯曲の進展の内的必然性及び本当らしさと抵触しないように，細心の注意を払っている。すでにAristoteが内的必然性を守るために神の介入を禁じているのだが(3)古代ギリシアと十七世紀のフランスでは本当らしいことの領域も異なるのが当然であり，それについてRacineはつねに配慮を怠らない。*Iphigénie*の結末についての説明では，Eriphileを登場させることで本当らしさも内的必然性も守り得たことを自賛しつつ，Dianeによる救いや変身による解決に対する同時代人の，想像される不信について触れている箇所が見受けられる。(4)Racineはopéraとの対抗上，非常に厳しくこれらの規則を自らに課しているのであり，また彼が*Iphigénie*で七年ぶりにギリシアを素材

にとりあげたのも opéra との対抗で説明するのが通説となっている。(5) *Phèdre* の序文でも，彼は，Thésée の不在の理由を説明しつつ，十七世紀の本当らしさの規準を考慮している。

> "Ainsi j'ai tâché de conserver la vraisemblance de l'histoire, sans rien perdre des ornements de la fable, qui fournit extrêmement à la poésie." (6)

神話を，合理的に納得できるものに変えながら，poésie のために利用する。これが Racine の基本的な態度である。例として Hippolyte の死を取りあげよう。確かに海の怪物が現われるものの，死それ自体は，怪物（これは Hippolyte に殺される）の出現に驚いた馬の暴走が原因である。かつ，Hippolyte が恋に悩んで馬術に身を入れなくなっていることは，くり返し述べられている。(7) ここで神も出現するが *Iphigénie* での Diane の顕現と同じく，récit の枠組内で，しかも récit の語り手にとっても噂にすぎないこととして扱われ，また偉大な Neptune は馬の脇腹をつつく役割しか果さない。(8)

> On dit qu'on a vu même, en ce désordre affreux,
> Un Dieu qui d'aiguillons pressait leur flancs poudreux. (V, 6)

しかし，重要なことは，細部におけるこれらの配慮にもかかわらず，Hippolyte の死が Neptune によるものであると，ひいては Oenone による中傷と神々の介入がその原因だと感じさせずにはいないということである。Phèdre の言う Vénus による恋情も，十七世紀における本当らしさの規準を考慮したうえでの神々の介入の形態と考えられるが，ともかく Phèdre は神々の介入にこだわり続ける。

このように Racine が，十七世紀におけるギリシアの神々の受容の困難な状況にもかかわらず，神々が不当に人間を圧迫しつつその運命を決定しているという見解を四編の悲劇で固持し続けたこと，特に劇作家としての経歴にいちおうの終止符を打つことになる *Phèdre* で，内的宿命という新しい運命を創り，喚起力に富む表現をそれに与えたことが，興味をひかざるをえないのである。この興味の背景に，はじめに触れた今世紀中葉のギリシア悲劇への関心の高まりがあるのは当然であり，多くの批評が，Racine の悲劇とギリシア悲劇を比較し，Racine が十七世紀における

稀な例外としてギリシア悲劇を真に，もしくは今日と同じ仕方で，理解していたかという問題を提起し，その結果からRacineの個人的信念や彼の思想史上の位置に及ぶ考察を行っている。ここでこれらの問題を全てにわたって取り上げることはできないが，出発点であるRacineのギリシア悲劇の理解の問題は，今まで検討してきたRacineの悲劇における運命と神々と深い関わりをもつので，それをめぐって幾つかの立場を取りあげてみたい。ここでは議論の煩雑を避けるために対象を *Phèdre* に限定することにする。

(2) 超越性をめぐって

最初に，今世紀中葉のフランスにおける悲劇への関心において大きな役割を果したH. Gouhierをとりあげたい。Gouhierの立論で注目すべき点は，宿命の要素に必然性と超越性の二つを認め，宿命はその必然性にもかかわらず超越性により悲劇的であるとしたこと (la fatalité est tragique malgré la nécessité.) (9) そして超越する必然性である宿命が超越するのは自由な存在なのだから，宿命は自由を前提とし，この点で科学的決定論とは異なると考えた点にある。(Il n'y a donc transcendance de la nécessité que par rapport à un être libre. Il n'y a donc pas de fatalité sans liberté.) (10) 情念はそれが狂気であるか，或いはそのようなものとして超越を意味する限り悲劇的であるとし，彼はPhèdreを例にあげる。(11) またPhèdreの情念が悲劇的であるのは，その超越性が，彼女に力を欠いた意志を残しておくからである。(12) ここでGouhierは，Phèdreの情念が神々に決定されたものであるにもかかわらず，彼女はそれに対し有罪感を抱くという，Phèdreの自由と責任の問題に一つの解決を与えている。しかしそれにもまして重要なのは，悲劇性が超越性に由来すると主張したことで，この考えは大きな影響を及ぼした。Gouhierは超越性という語をかなり広い意味で使っているが，Phèdreに関しては，彼女の宿命の超越性とは，それが神々に決定されているという超自然性だと考えてよい。(13)

Gouhierの立場に近い例として，A. Adamがあげられよう。Adamは，Phèdreの神とは，我々のうちにあり，しかも我々にとっては異質で，我々をのりこえ圧迫する力に与えられた名だと考えている。そしてその発見が，悲劇性の発見であり，(Cette découverte de l'inhumain qui est en l'homme, c'est la découverte du tragique.) (14) ギリシア悲劇の精神の発見であった。(Il avait, en écrivant

Phèdre, retrouvé l'esprit de la tragédie antique. Il avait retrouvé le tragique.) (15) Adamはここで問題となっている神を，キリスト教であれ，古代ギリシアであれ，それらの宗教の神々と同一視することは避けているがその神性を認めている。(Ce sont les dieux qui exigent le sacrifice d'Iphigénie, ce sont eux qui veulent le crime de Phèdre. Ses deux dernières tragédies sont des drames sacrés.) (16) 人間の苦しみに喜びを見出し，人間を罰する権利を得るために罪を犯させるような神々に世界は委ねられているという残酷な神学がここにはあり，その結果，理性と正義を信じていた十七世紀人よりも，悪に対する認識を深めている我々に対して，Racineの作品はより新しく生命力をもつのだとAdamは評価する。(17) Adamの考えは，Phèdreの情念に超越性，聖性を認め，それが悲劇性を生むとする点でGouhierと似通っている。Gouhierは，超越性は詩によって喚起される必要があると考えているが(18) Adamは，Racineにおいて詩と悲劇性は融合する，と言う。それはRacineが，Corneilleと異なり，悲劇性を超越性に見たからである。(C'est qu'à la différence de Corneille, il mettait le tragique, non dans le choc de volontés contraires, non pas même dans les conflits intimes d'une volonté déchirée, mais dans l'intervention des forces inhumaines qui pèsent sur nos vies.) (19)

これらの説を我々の立場から見ると，Phèdreの言う神々とは彼女の内的葛藤の表現であるとして，その神々が決定しているとされる彼女の情念の超自然的性格を認めない場合，悲劇性が何に由来するかが問題となる。その解答の一例として J. Scherer をとりあげよう。Scherer は，Racineの登場人物たちは自由であると考え，しかし彼らはこの自由を疎外して必然性の見せかけの支配に服従し，その時悲劇性があらわれると考えている。疎外は，人間性への裏切りであり，罰されるに値する。疎外は多くの場合，恋愛の形で現われる。またこの疎外の悲劇は，"fabulation"の悲劇により完全にされる。つまりRacineの登場人物たちは，彼らの意図的な隷従を正視できずにその責任を超自然的な力へ投げかける神話によってこの隷従を説明するのである。

> "Le héros racinien est toujours capable, mais toujours rétrospectivement, d'exercer une fonction fabulatrice qui crée des images anthropomorphiques de ce qu'on appelle commodément le destin." (20)

M. Delcroixも結論において，Scherer の言う神話機能を重視している。悲劇的なものは古代の宿命の内在化にのみ成立するのではない。運命とは，

> "rendu à sa vérité, il(le destin) n'est plus qu'un concept, nourri et malmené par l'esprit qui le crée"

であるとして非・超自然的に解釈し，悲劇性を造型するのに充分ではないと考える。(21)また Racineの作品は，登場人物を永続的な悲劇的世界や不動の悲劇的超越の中に位置づけるわけでもない。そこで Delcroix は，登場人物の心理における，神話的所与の深化を重視し，そこに Racineの独創性と悲劇性を見ている。

> "La création de Racine, son originalité, apparaît bien dès lors comme une capacité d'approfondir dans le coeur et la conscience d'un personnage les suggestions de la tradition qui le porte. Que cet approfondissement psychologique ait été pour lui une des occasions, la plus importante peut-être, de l'enrichissement de son tragique, c'est ce que notre analyse a cru montrer." (22)

Scherer も Delcroix も，Phèdre の宿命である情念を非・超自然的に解釈しつつ，この宿命と Phèdre の協調，およびそれを超自然的であると要請する際の彼女の神話機能，もしくは神話の心理的深化を悲劇的と考えている。彼らは，超自然的宿命のかわりに主人公の作りだした観念を見，超越性を喚起する詩のかわりに超越性の不在を隠蔽する神話を見ているのであるが，その上で悲劇性は超越性に由来するという Gouhier の説を踏襲していると言えるだろう。一方，R. Picard は Phèdre の言う内的宿命をやはり非・超自然的に解釈し，"fatalités biologiques ou religieuses" (23) が Phèdre を決定しているのではなく，彼女は自由であるとして Scherer や Delcroix と同じ立場をとる。

> "Dans le déroulement tout psychologique de la pièce, non seulement l'efficacité du destin n'apparaît guère, mais encore il semble que le personnage utilise l'image de la fatalité, tantôt comme un moyen d'action, tantôt comme une excuse ou un déguisement de ses faiblesses." (24)

ここからPicardはPhèdreの自由と責任の問題へと議論をすすめ，神々とは我々の限界の人格化に他ならず，Phèdreもまた自由の要請は無限であることを知っているのだと言う。Phèdreの罪は人間の自由の曖昧な領域でなされ，その結果，彼女はつねに許されるべきと見え，かつつねに自分に責任があることを知っている。Phèdreは自由の証人なのであり，この戯曲は，人間の自由の問題を扱っている。

> "Racine remplit ici la vocation éternelle de la tragédie, qui est d'orchestrer une méditation sur la situation de l'homme." (25)

そして悲劇性に関しては，それを内的宿命との関連においてのみ見る視点を捨て，五幕にわたるPhèdreのあゆみを重視する。

> "Le tragique de Phèdre, c'est qu'elle s'est laissé dérober une mort honorable, engagée qu'elle était dans ses événements, entre lesquels elle a reconnu bien vite le lien intentionnel de la fatalité." (26)

ここでPicardの言う"fatalité"は，我々が広義の運命として定義したものと同じであると考えて良いだろうが，ただPicardと異なり，我々は事件の連鎖をも含めた彼女のあゆみを，Phèdreが自分の運命として自覚したとは考えない。勿論Phèdreは，

> Je mourais ce matin digne d'être pleurée;
> J'ai suivi tes conseils, je meurs déshonorée (III, 3)

と述べ，"une mort honorable"を奪われて死ぬことを自覚してはいるが，情念は神々に帰し，出来事の運びはOenoneの責任とし，出来事自体には目を向けず，その"lien intentionnel"を自覚するには程遠いと思われる。

(3) 運命と超越性

K．ヤスパースは，自由で責任能力のある主体が何らかの行動をおこし，闘争を

し，挫折し破滅するという悲劇のパターンを提出し，このパターンの解釈の一例としてギリシア悲劇で支配的な神話的解釈があると考えた。この解釈は，挫折した人間の意志の対極に運命，つまり人間の意志の及ばない出来事の不可避的な導きを見，運命を超越者の働きに帰すのだとヤスパースは言う。(27)運命の必然性と超越性に着目する点でヤスパースは既に触れたGouhierと同じであるが，Gouhierがこの二つを運命の，運命を悲劇の，構成要素とするのに対し，ヤスパースは必然性と超越性は運命の，運命は悲劇の，解釈としている点に主要な差異が認められる。運命が，その必然性も超越性も含めて解釈であるとすれば，それが決して人間の自由を妨げず，責任を排除しないのは当然のことであろう。しかしヤスパース流に言えば，悲劇の一解釈である，ギリシア悲劇の神話的解釈は，以上にみたように今日でも圧倒的な影響を与え続けている。

すぐれたギリシア的教養を身につけていたRacineは，ギリシア悲劇の神々を理解するのが困難であった十七世紀において，稀な例外として，この＜神話的解釈＞を継承し，神々が人間を不当に圧迫しつつその運命を決定するという見解を，その悲劇作品に採用した。このRacineの特殊な位置を説明するために，彼の神々の残酷さを説明するために，jansénismeの神との類似がしばしば援用される。M. Butorのようにキリスト教の神への反抗を見る場合もある。或いはギリシア悲劇の精神の再発見が論じられる。Racineはその経歴から見ても活動した時期から見てもjansénismeと何らかの影響関係になかったはずはなく，またすぐれたヘレニストとしてギリシア悲劇から影響を受けなかったはずもない。(31)しかしRacineの悲劇作品で言及される神々をこれらの宗教の神々と同一視することはできない。Racineの神々は多様なあらわれを見せ，特定の宗教の神学を構成するには程遠い。或いはまた，Racineが，特定の宗教から離れて，彼独自の残酷な神学を構成し，この神々の迫害に圧倒される人間を描くことを目的としたとも考えられない。

神々は何よりも“des ornements de la fable, qui fournit extrêmement à la poésie”(28)であり，ギリシア的な色どりをそえつつ，JocasteやOresteにとっては悲嘆の，Phèdreにとっては苦悩にみちた葛藤の表現であった。神々はまた，劇作家の作為を感じさせずに，彼らの運命に偉大さと統一性を与える役割を果している。幾人かの登場人物が，彼らの運命は神々に決定されていると言うが，それは信じようと思えば信じられ，合理的に解釈しようと思えばそれも可能なように仕組まれている，つまり取りはずしの出来る神々なのである。そのうえ登場人物の把握している彼らの運命と読者に把握されるそれには，ずれが認められる。そのずれは，

最もギリシア悲劇的に神々に圧倒されているとされる。Phèdreにおいて最大となる。このような取りはずし可能の神々を信仰の対象である神性をそなえた神々と考えることはできない。

結局Racineが，悲劇の＜神話的解釈＞を採用したとしても，それは登場人物の言及という限られた範囲においてなのであり，Racineが提出する問題は，正確に言えば，ギリシア悲劇の神話的解釈を継承したことではなく，それを悲劇作品の中で，登場人物の自己解釈の手段としたことであると思われる。悲劇性は，この自己解釈の中にみられる荘麗な仮構である取りはずし可能の神々に由来するのではなく，Phèdreを例にとれば，我々が広義の運命とした彼女の，初めから有罪感を抱きながらより罪深くなってゆく過程にある。

この広義の運命をも何らかの残酷な神々によるものと考えるかどうかは読者の判断に委ねられている。しかしここにおいても再び＜神話的解釈＞を採用する必要があるとは思われない。ただこのような運命の造型には，Racineの非常に強い悲観的傾向が認められる。またそれを可能にしたのは，Lansonの言う "Jeu du ressort psychologique, avec un emploi modéré et vraisemblable des coïncidences et des moyens extérieurs" (29) つまりRacineの精緻な劇作法であったことを忘れることはできない。しかしこの運命は，高度の技巧性や悲観的傾向にもかかわらず，一人の人間の運命として圧倒的な印象を与え，

> "la compassion et la terreur, qui sont les véritables effets de la tragédie." (30)

をひきおこすことに成功し，それによって神々の圧倒にとどまらぬ，人間的なものへの証言となっているのである。

（註）

Racineの作品からの引用はすべて，Jean Rcine, Oeuvres complètes, édition presentée, établie et annotée par Raymond Picard, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1969 による。なおとくに戯曲中からの引用は本文中で場面を示したので，ここでページ数をも示すことは略す。

序

(1) Préface de *Phèdre,* in Oeuvres complètes, éd. R. Picard, Paris, Gallimard, Bibliothèque de la Plèiade, t. I. 1969, p. 745

(2) Cf. le chapitre III de *La Tragédie classique en France*

(3) Op. cit, p. 9

I

(1) Préface de *Phèdre,* éd. citée, p. 745

(2) *Phèdre,* éd. citée, p. 759

(3) Je voulais en mourant prendre soin de ma gloire,
Et dérober au jour une flamme si noire. (I, 3)

(4) Oenone は次のように言っている。

Votre flamme devient une flamme ordinaire.

また

Et vous pouvez le voir sans vous rendre coupable.

(5) 例えば Théramène は次のように言う。

Pourriez-vous n'être plus ce superbe Hippolyte,
Implacable ennemi des amoureuses lois, (I, 1)
Et d'un joug que Thésée a subi tant de fois?

(6) 後出の Soleil への言及のほか

Mes yeux sont éblouis du jour que je revoi, (I, 3)
Et dérober au jour une flamme si noire; (I, 3)

などの詩句があげられよう。

(7) Oenone は第三幕第一場で次のように言う。

Ainsi dans vos malheurs ne songeant qu à vous plaindre,
Vous nourrissez un feu qu'il vous faudrait éteindre,

同第三場で Phèdre は不倫の恋の露見を恐れて想像に身を委ねている。例えば,

Il me semble déjà que ces murs, que ces voûtes
Vont prendre la parole, et prêts à m'accuser,
Attendent mon époux pour le désabuser.

(8) Toi-même rappelant ma force défaillante,
Et mon âme déjà sur mes lèvres errante,
Par tes conseils flatteurs tu m'a su ranimer.
Tu m'as fait entrevoir que je pouvais l'aimer.

(III, 1)

Je te l'ai prédit, mais tu n'as pas voulu.
Sur mes justes remords tes pleurs ont prévalu.
Je mourais ce matin digne d'être pleurée;
J'ai suivi tes conseils, je meurs déshonorée. (III, 3)

(9) Jean Pommier は *Aspects de Racine* でこの問題を論じ Phèdre は Hippolyte の死を知らなかったと解釈している。

II

(1) Cf. les notes de R. Picard, éd. citée, p. 1067

(2) Thébains, pour n'avoir plus de guerres,
Il faut, par un ordre fatal,
Que le dernier du sang royal
Par son trépas ensanglante vos terres. (II, 2)
が神託である。

(3) 第三幕第二場の Jocaste の独白は神々への抗議で占められている。たとえば
Et toutefois, ô Dieux, un crime involontaire
Devait-il attirer toute votre colère?

Voilà de ces grands Dieux la suprême justice!
Jusques au bord du crime ils conduisent nos pas;
Ils nous le font commettre, et ne l'excusent pas!

(4) あやまちと言って良いであろう。 Jocaste はピランデルロの登場人物ではないのだから。

(5) Mais admire avec moi le sort dont la poursuite
Me fait courir alors au piège que j'évite. (I, 2)

(6) Cf. les notes de R. Picard, éd. citée, P. 1081

(7) R.–C. Knight は *Racine et la Grèce* の中で次のように述べている。
(P, 321)
"Et la volonté divine pèse, sous la forme de songes, sur la conscience d'Agamemnon: (...) Ce trait, trouvé par Racine, inaugure la conception qui, dans Phèdre, recevra un développement bien plus impressionnant: les dieux agissant, non sur les événements, mais sur la conscience du personnage."

(8) Préface d'*Iphigénie*, éd. citée, p. 670

(9) たとえば L. Goldmann は *Le Dieu caché* のなかで,

"l'unité de pièce est troublée par la coexistence d'un univers providentiel qui ne laisse aucune place au tragique et d'un univers tragique qui ne laisse aucune place à la Providence" (p. 402) とのべ, R. Barthes は *Sur Racine* で "La tragédie ainsi fixée dans le personnage d'Eriphile, le drame bourgeois peut déployer sa mauvaise foi" (p. 110) と言っている。

(10) Eriphile は自分に下された神託について

J'ignore qui je suis; et pour comble d'horreur,
Un oracle effrayant m'attache à mon erreur,
Et quand je veux chercher le sang qui m'a fait naître,
Me dit que sans périr je ne me puis connaître.

と説明している。

(11) Ed. citée, p. 664

III

(1) Op. cit, p. 319 et suiv.

(2) R.–C. Knight, *Les Dieux païens dans la Tragédie française,* in Revue d'Histoire littéraire de la France, pp. 414 et 416

(3) Aristote, *Poétique,* trad., J. Hardy, 1454b, p. 51

(4) Préface d'*Iphigénie,* éd. citée, p. 670

(5) R.–C. Knight, *Racine et la Grèce*, p. 328 et suiv.

(6) Préface de *Phèdre*, éd. citée, p. 746

(7) たとえば Théramène は第一幕第一場で次のように言う。

(. . .) et depuis quelques jours
On vous voit moins souvent, orgueilleux et sauvage,
Thantôt faire voler un char sur le rivage,
Tantôt, savant dans l'art par Neptune inventé,
Rendre docile au frein un coursier indompté.

(8) *Iphigénie* における Diane の顕現は Ulysse によって伝えられる。

Le soldat étonné dit que dans une nue
Jusque sur le bûcher Diane est descendue,
Et croit que s'élevant au travers de ses feux,
Elle portait au ciel notre encens et nos voeux. (V, 6)

(9) Henri Gouhier, *Le Théâtre et l'existence,* p. 48

(10) Ibid., p. 49

(11) Ibid., p. 38
(12) Ibid., p. 55
(13) Ibid., pp. 50–52
(14) A. Adam, *Histoire de la Littérature française au XVIIème siècle,* t. IV, p. 405
(15) Ibid., pp. 403 – 404
(16) Ibid., p. 410
(17) Ibid., pp. 405 et 411
(18) Op. cit., p. 61 et suiv.
(19) Op. cit., p. 410
(20) J. Scherer, *La Liberté du Personnage racinien,* p. 269
(21) Op. cit., p. 446
(22) Ibid., p. 448
(23) Ed. citée, p. 741
(24) Ibid., p. 742
(25) Ibid., p. 743
(26) Ibid., p. 739
(27) K. ヤスパース, 「悲劇論」
(28) Préface de *Phèdre,* éd. cit., p. 746
(29) G. Lanson, *Esquisse d'une Histoire de la Tragédie française,* p. 104
(30) Préface d'*Iphigénie,* éd. citée, p. 671
(31) M. Butor, *Répertoire*

参　考　文　献

ADAM (Antoine), *Histoire de la littérature française au dix-septième siècle,* t. IV. Paris, Dormat, 1954.

AMER (Henri), *Le Hasard, l'homme et les dieux.* in Nouvelle Revue Française, 13ème année, 147, mars 1965.

ARISTOTE, *Poétique*, trad. J. Hardy, Paris, Les Belles–Lettres, 1932.

BARNWELL (Harry T.), *Intrigue et pathétique dans le théâtre de Racine.* In Actes du premier congrès international racinien, uzès, Peladan, 1962.

Le Tragique dans la tragédie française (traduit par J. Dubu) in Jeunesse de Racine, 1960.

BARTHES (Roland), *Sur Racine,* Ed. du Seuil, Paris, 1963.

BUTOR (Michel), *Répertoire,* Paris, éd. de Minuit, 1960.

DEDEYAN (Charles), *Racine et sa "Phèdre",* Paris, Société d'édition d'Enseignement supérieur, 1965.

DELCROIX (Maurice), *Le Sacré dans les tragédies profanes de Racine,* Paris, Nizet, 1970

ELLIOT (R.), *Mythe et légende dans le théâtre de Racine,* Paris, Minard, 1969

GOLDMANN (Lucien), *Le Dieu caché,* Paris, Gallimard, 1956.

GOUHIER (Henri), *Le Théâtre et l'existence,* Aubier, éd. Montaigne, 1963.
Tragique et transcendance, in Le Théâtre tragique.

KNIGHT (Roy C.), *Les Dieux païens dans la tragédie française* in Revue d'Histoire Littéraire de la France 64ème année, 1964.
Racine et la Grèce, Paris Boivin, 1950.

LANSON (Gustave), *Esquisse d'une histoire de la tragédie française,* Paris, Champion, 1927

POMMIER (Jean), *Aspects de Racine,* Paris, Nizet, 1954

SCHERER (Jacques), *La liberté du personnage racinien* in Le Théâtre tragique.

TALADOIRE (B. A.), *Sur la fatalité du théâtre classique,* in Hommage au doyen E. Gros, Paris, 1959

TRUCHET (Jacques), *La Tragédie classique en France,* Paris, Presse Universitaire de France, 1975.

K. ヤスパース，悲劇論，理想社